

聖武天皇大嘗祭木簡、 展示覚書

はじめに 2024年1～3月、都城発掘調査部平城地区がおこなった発掘調査で、奈良時代の大嘗祭に関連する木簡が多数出土した（平城第658次調査）。神亀元年（724）の年紀をもつことから、聖武天皇の大嘗祭に関連するとして、注目を集めた。折りしも、2024年は聖武天皇の即位からちょうど1300年の節目にあたり、平城宮跡資料館では特別展を開催した。さらに、より多くの方々に木簡をみていただこうと、奈良国立博物館（以下、奈良博）でも木簡の特別陳列を開催することができた。

これまで奈文研と奈良博は、独立行政法人国立文化財機構の発足以来、平成19年（2007）の「新指定 平城宮の木簡」や、令和元年（2019）の共催展覧会「ならのみやこのしょくぶつえん」と「いのりの世界のどうぶつえん」などのコラボ企画をおこなってきた。

今回の特別陳列では、奈良博を訪れる方々に埋蔵文化財である木簡を開陳することで、奈良の文化財に対する理解を深めたり、新たな興味を引き出したりするきっかけになった。また、奈文研にとっても最新の調査研究の成果を新たに興味関心がある層に発信することができた。そして、なにより、奈文研と奈良博が共催で、最新の調査研究成果を柔軟に発信できた意義は大きい。本稿は不安定な状態ともいえる水漬け木簡を、いち早く広く観覧に供するため、奮闘した作業記録である。

ちなみに、平城宮跡資料館での展示は、「令和6年度秋期特別展 聖武天皇が即位したとき。－聖武天皇即位1300年記念－」、展示期間は令和6（2024）年10月22日（火）～12月8日（日）＊木簡はⅠ期（10月22日～11月17日）、Ⅱ期（11月19日～12月8日）で展示替え、展示場所は平城宮跡資料館企画展示室である。また、奈良国立博物館での展示は、「特別陳列 聖武天皇の大嘗祭木簡」、展示期間は10月22日（火）～11月11日（月）、展示場所は仏像館入って左展示室西壁の壁付き展示ケースである。

水漬け木簡の展示 木簡を浸している水溶液は、約0.4%のホウ酸ホウ砂水溶液である。注意事項としては、ホウ酸ホウ砂水溶液の温度である。展示室の気温は、どこもだいたい20℃前後であろうが、冬場の寒い収蔵庫などでホウ酸ホウ砂水溶液を作った場合、水溶液中に気体



図108 奈良国立博物館での展示風景

を多く含んでしまう。そのため、冷たい状態の水溶液を展示ケースに満たした場合、20℃前後に温度があがると、水中の気体が気泡となって出てくるので注意を要する。水溶液から出てきた気泡を除去することは、手間がかかるため、できるだけ展示環境に近い水温のホウ酸ホウ砂水溶液を用いる方が良い。

奈文研はこれまで2007年から2022年まで約15年、秋に開催していた「地下の正倉院展」を中心に、水漬け木製品の展示について、ノウハウを蓄積してきた。今回の



図109 平城宮跡資料館での水漬け木簡展示風景

水漬け木簡の展示については、そのアクリルの展示ケースについて、これまでの問題点を整理して、新たな設計図をもとに展示ケースを作成することからおこなった。比較的廉価な方法で、水漬けの考古資料を展示する手法として、展示ケースの設計図とともに、報告する。

これまでのアクリル展示ケースと問題点 これまでの「地下の正倉院展」などで使用していた木簡の展示ケースを図110に示す。6面とも厚さ5mmのアクリル板で、側板の内側に、蓋受けの突起を四周に回す構造で、天板を載せると、側板と天板が上面を揃えるように設計されている。

かつてはアクリルケースに水溶液を入れて木簡を中に入れるだけの展示ケースだったが、地震の発生などにより水が失われるリスクを軽減するため、蓋をつけることになった。

図110左-①のように、蓋と水面に空間があると、天板に水蒸気が付着するため、木簡がよくみえない事態となる。そこで、天板の取り外し用に穿った直径15mm程度の孔から、スポットで蓋の下面ギリギリまで水を足す作

業が必要であった。しかし、水平なところで作業をおこなっても、水溶液の表面張力もあり、③のように、一部に気泡が残り、この除去に非常に苦労することとなる。

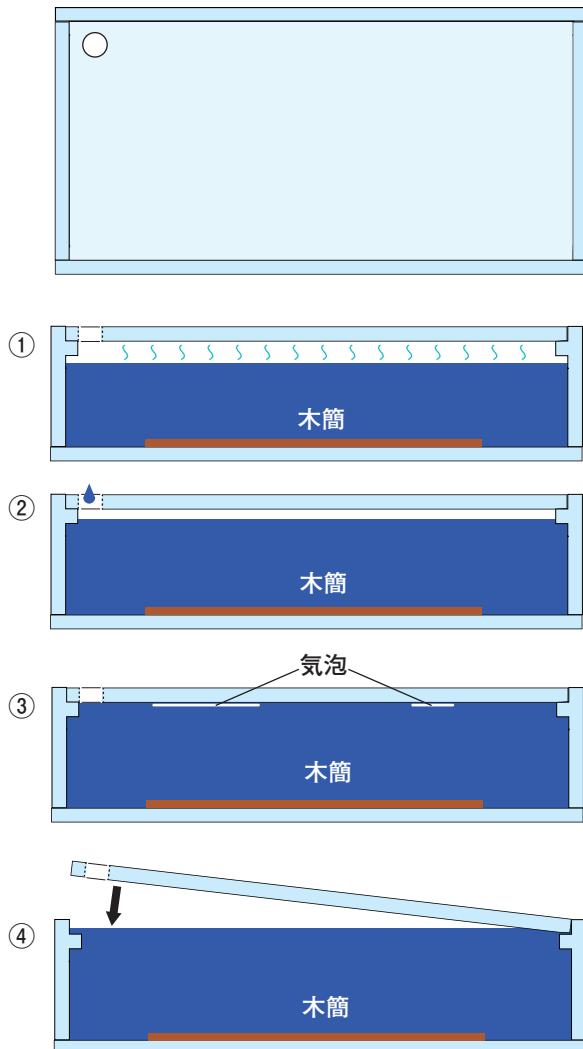
気泡を入らないようにするために、④のように、蓋受けの少し上まで水溶液を入れ、孔から空気を抜きながら、蓋をする必要がある。この方式の難点としては、どうしても水溶液が溢れてしまうという大きな問題があった。

改良型アクリル展示ケースの設計 今回、特に奈良博では機密性の高い壁付き展示ケース内での展示でもあり、水溶液がこぼれることは絶対に避けなければならなかつた。既存のアクリルケースの問題点を克服すべく、改良型のアクリルケースの開発を目指すことになった。いくつかの案が出されたが、結果的に落とし蓋方式で設計されたアクリルケースを採用することとした。

蓋を除く5面をアクリルで組み立てることは従来通りであるが、改良型は蓋受けの凸起が側板の上端から10mm下に取り付けられているのがポイントである(図111参照)。

蓋はアクリルではなく、厚さ2mmのガラスを採用した。アクリル素材は、重しを載せて保管するなど、保管

○これまでの木簡展示ケース



○今回改良した木簡展示ケース（落とし蓋型）

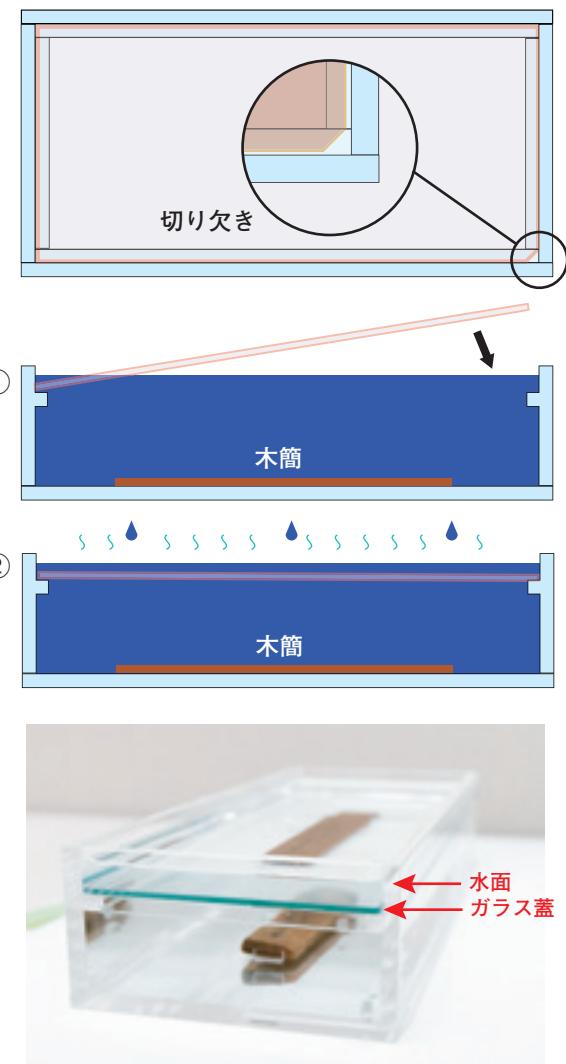


図110 アクリル製水漬け木簡の展示ケース

に気を配らなければ歪みを生じやすい。既存のアクリルケースのなかにも、蓋に歪みがあるため、気泡が抜けないものがあった。この点をクリアするために、ガラス素材を採用することとした。ガラス蓋の右下には斜めに切り込みを入れ(図110右上)、ここに市販の耳かきを用いて、蓋の開け閉めをおこなう構造とした。

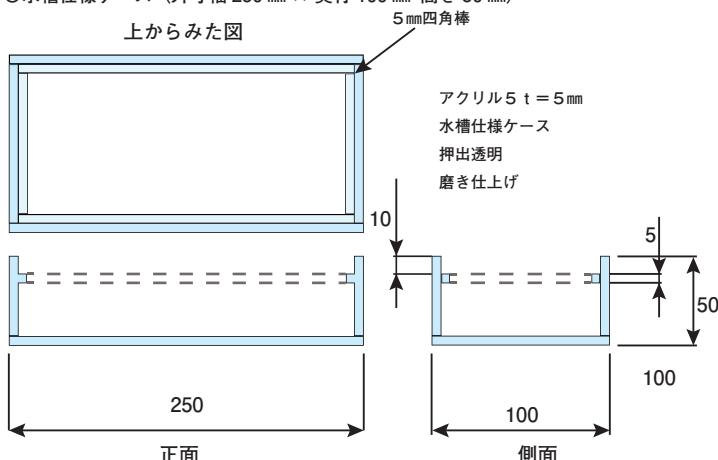
改良型アクリル展示ケースの利点と課題 木簡を入れた状態で、蓋受けの上まで水溶液を入れ、空気を抜きながら蓋をし、最終的にガラス板は水溶液中に水没させるかたちとなる。改良型アクリルケースの長所をまとめると、(1) 蓋自体が水溶液中に浸ることで、気泡や水蒸気の影響を除外できる、(2) 蓋の上の水溶液が蒸発し

てしまっても、ケース内の水溶液は保たれる、(3) 蓋の上から注水できるため、メンテナンスが容易である、(4) 設置時に水溶液が溢れるリスクを軽減できる、などが挙げられる。

しかしながら、短所がないわけではない。蓋の上の水溶液は2~3日で蒸発してしまうため、こまめな注水が欠かせない、水溶液が蒸発したあとにホウ酸ホウ砂の白い結晶がガラス蓋に残る、展示ケース内の湿度が上がる、といった問題点が挙げられる。今回、木簡8点を15日間展示した奈良博なら仏像館の壁付き展示ケース内は、70%近くまで湿度が上がってしまった。調湿剤を多く入れるなどの工夫をしてモニタリングをおこなう必要

○水槽仕様ケース (外寸幅 250 mm × 奥行 100 mm 高さ 50 mm)

上からみた図



○ガラス蓋 (縦 89 mm × 横 239 mm)

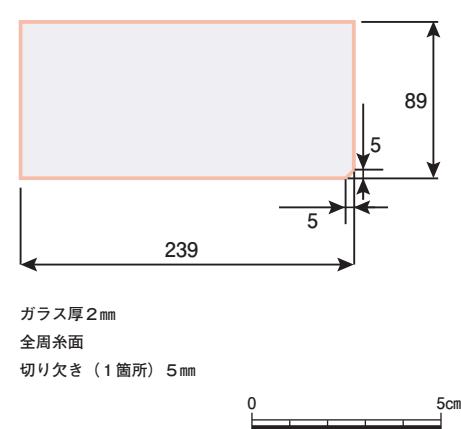


図111 アクリルケースの設計図 (スケール1/2)

があるが、現状ではエアタイトの展示ケース内では金属製品や保存処理済み木製品などと一緒に展示することは難しいと言わざるを得ない。

さらに追加の工夫 水漬けの木簡・木製品を展示する場合、ケース内で遺物が泳いでしまうことがままある。そのため、3mm角のアクリル棒を1cm程度に切ったものを用意した。これらをアクリルケースの底面に、木簡の上下左右、4カ所にガイドとして固定した。固定にはフィギュア固定用の強力両面テープを用いた。水漬け木簡の展示は、念の為、保存処理済み木簡の運用にあわせ、約2週間を最長として展示替えをおこなった。約2週間の展示期間中に、この両面テープが外れたり、劣化したりすることはなかった。

また、展示作業中の水漏れ対策として、奈良博での展示では、木簡アクリルケースの下にキッチン用品の珪藻土マットを敷いた。平城宮跡資料館での展示でも、珪藻土マットを展示ケースに入れることによって、湿度が低下することがわかった。今後、このような展示をおこなう際の備忘録として、書き記しておく。

水漬け木製品の展示方法に関する研究は、特に埋蔵文化財を扱う上で、欠かせないテーマである。今回の奈良博と奈文研のコラボ展示を通して得たノウハウを、地方公共団体や他館での水漬け木製品の展示に活用していくだければ幸いである。

(神野 恵・山本祥隆・福島冠如・

中川あや／奈良博・樋笠逸人／奈良博)



図112 追加的に講じた工夫